“コロナ禍”と社会的距離　　平口 哲夫

新型コロナウイルス(COVID-19)感染予防のために、WHO(世界保健機構)が人々の濃厚接触を避けようと、ソーシャル・ディスタンシング(social distancing)を呼びかけたところ、日本ではソーシャル・ディスタンス(social distance、社会的距離)という言葉が、にわかに流布するようになりました。若草教会でも濃厚接触を避けるために特別の対策をとったことは、『すなどり』前号(No.226)に掲載されている通りです。

ところで WHO が social distancing を呼びかけたのは、人々が密集する行事やキス・ハグ・握手などの身体的接触は社会的な行為なので、social という形容詞を付したのですが、実はソーシャル・ディスタンスという言葉は、社会学や心理学の専門用語として使われているので、それとの混同が問題となりました。

WHO は感染予防のために、社会的・心理的な意味での距離ではなく、物理的・身体的な意味での距離を一定以上とることを求めているのであって、社会的・心理的な親密さを損ないたくはないので、social distancing を physical distancing(物理的距離)と言い換えるようになりました。「physical」には、物理的、自然的、身体的などの意味があります。たとえば、私の専門分野である考古学の隣接科学である natural anthropology(自然人類学)は、physical anthropology (形質人類学)とも呼ばれてきました。

実際、“コロナ”感染者やその家族、勤務先、所属学校、収容施設などに不当な批判や差別や嫌がらせが行なわれ、まさに WHO が望まない事態が起きました。そういうことが横行すると、感染したかもと思っても検査を受けることを躊躇し、その結果、発症してから病院で診察を受けることになり、それまでに感染を広げたり、重症化して手遅れになったりするおそれがあります

“コロナ禍”に限らず、社会的距離を押し広げ、人間関係を壊してしまうハラスメント、イジメ、虐待などが横行しているのは由々しき事態です。特に、家庭での幼い子どもに対する虐待が、保護者であるべき親によって行なわれるという事件が多発していることに胸がつぶれる思いがいたします。

第二次世界大戦後、日本は、戦争はしていないという意味では平和であっても、平和学でいう構造的暴力(貧困、飢餓、抑圧、差別など、社会構造に起因する暴力)がないという意味での平和(積極的平和)がもたらされているわけではありません。

SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)で誹謗・中傷を受けた、俳優・演出家の土屋シオンさん(28 歳)が加害者を突き止め、中学生から大学生までの男女と話したところ、拍子抜けするほど加害意識が希薄で、「ネットの問題をリアルの世界に持ち込まないでください」、「母親とか学校とかにツイート見られるほうが地獄」だと反論する人もいて、「ネット上と現実世界を切り分けてとらえている点も気になった」そうです。この話を毎日新聞のデジタル版で読んだ私は、匿名をいいことに SNS で不当な誹謗・中傷をする人は、SNS をデジタルゲームのごとく思っているのかもしれないと推定しました(デジタルゲームなら現実世界ではなく、何をしようがかまいませんから)。 SNS は、時空の制約を超えて社会的距離をよくもわるくもするということを痛感します。

SNS に比べるまでもないことですが、新約聖書の「信徒への手紙」はなんと素晴らしいことか。使徒パウロの手によるとされる「ローマの信徒への手紙」(「ローマ書」)など七つの「信徒への手紙」は、新約聖書に収録されることにより、当時の信徒に対してだけでなく、後世の信徒への手紙にもなりました。特に「ローマ書」は、マルティン・ルターがとても高く評価し、自身によるローマ書講義に盛られた思想が「九十五カ条の論題」を生み、さらに宗教改革につながりました。このような手紙の真髄が社会的距離の荒廃を癒すことになるよう、お祈りいたします。

(すなどりNo.227から転載)